

会員増強委員会だより

第2回 aaca サロンの開催報告

『都市の関係性にはたらきかける“もの”』

須田武憲（GK 設計）、

齊木慶一（スペース・メニュー・ラボ）両氏をお迎えして

建築家
会員増強委員会委員
株式会社 NTT ファシリティーズ
日本建築美術工芸協会法人会員
石原智也



第2回の aaca サロンは、たまたま同時期に入会されたお二人に『都市の関係性にはたらきかける“もの”』と題して、それぞれこれまでの活動と関心のありどころをご披露いただき、建築やアートを環境や時間との関係でとらえることや、市民参加にも関連する話題など、参加者も交えて興味深い意見交換を行うことができました。

須田さんからは、都市の環境デザインについて、①道具がつくる都市景観、②動く道具による都市の新風景、③仮設がひらく未来のアクティビティ、というテーマでご紹介がありました。ここで言う道具とは、GK グループの創設者である栄久庵憲司氏が、「モノに心あり」という仏教の教えから道具を人間の鏡と捉え、いわゆるモノにとどまらない、建築や都市空間も含めた広範な概念のことを表しています。

①は、道路などのインフラや建築以外の付随する道具が風景をつくっていることに焦点をあて、たとえばイスラム教の巡礼者が年に一度、数百万人が集まったときのためのインスタントシティをつくる、メッカのマスタープランの提案が紹介されました。実現には至らなかったそうですが、必要に応じてつくるという考え方は、情報化が進み即時性が求められる現代においてますます重要になっています。1970 年の大阪万博では、ストリートファニチャーを初めてデザインの対象として扱い、建築以外の要素で風景をつくる先駆けとなりました。上質なデザインの工業製品で風景を構成する方法論は、今では当たり前になって日常風景のデザインの質を向上しています。

②では、コンパクトシティの代表例として、ヒューマンスケールの街を構成する富山ライトレールがよく知られています。新潟市の BRT や宇都宮ライトレールでは、車両だけでなく職員の名刺まで、さらには乗ることの体験まで含めてトータルにデザインすることが試みられていて、交通システムが地域のアイデンティティとして創造されています。

③は、ウィルスも通さないジッパーを使った手術室にもできるテントやモジュール化した個室など、防災への取り組みで養った仮設のノウハウを日常的に活用する試みです。ニュータウンなどで街が成熟し、人口減少で使われなくなった公共スペースや道路予定地などに、仮設店舗などを設置して街を再活性化するものです。デザインとともに、成熟期の社会制度に対する提案でもあります。

建築家であり彫刻家でもある齊木さんは、「建築・美術・都市」は一本線上にあり、キーワードは「関係性と変化」だと言います。イギリスの AA スクールで師事したセドリックプライスのもとでの経験が大きく影響していることが、数々の作品とともに紹介されました。

「進化する家」は、家族がライフサイクルで変化することに対応でき、また、敷地のある新興住宅地の成長や変化にも対応できる住宅です。グリッド状の木造と鉄骨の混構造で、変化に対応できる余白があらかじめ構成されています。

第14回 KAJIMA 彫刻コンクール金賞作品の「結界」は、募集条件にある設置場所の環境、特に周囲のバルコニーや列柱



メッカマスタープラン



新潟市 BRT



大阪万博



仮設でつくる公共空間